

上越における兼続と江戸における兼続

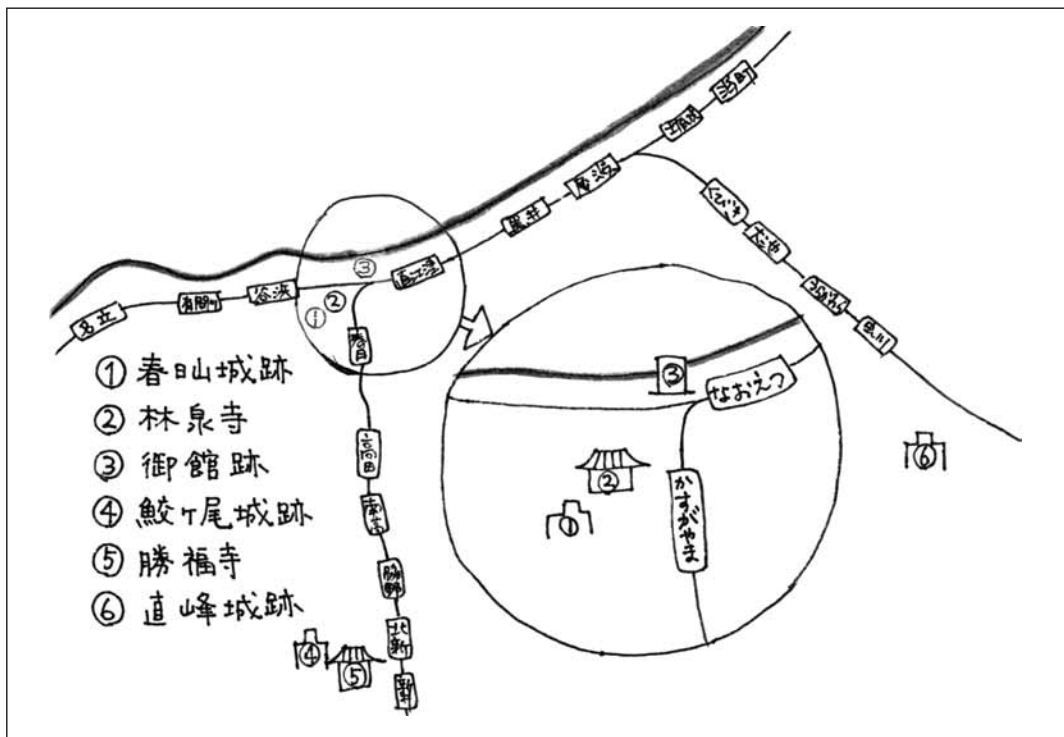
上越における兼続ゆかりの地

坂戸城下（現在の南魚沼市坂戸）で生まれ育った直江兼続（樋口与六）は、幼くして、坂戸城主長尾政景の嫡男、喜平次景勝に小姓として仕え、景勝が叔父上杉謙信の養子となると、景勝とともに、春日山城にやって来た。そして、上杉景勝が豊臣秀吉の命により会津に移封になるまで、春日山城に居を構えていた。そのため、上越地方にも、直江兼続に所縁のある場所がいくつもある。

これらの場所は、私たちが上越に住んで

いたときには、遠足などで何気なく行っていた場所ばかりであるが、これらの地を、直江兼続ゆかりの地として見直してみると、これまでとは異なる姿が浮かび上がってくる。今回、編集部では、直江兼続ブームに沸くこれらの地を訪ねて、あらためて私たちの故郷の歴史的位置付けを見直すことを試みた。

訪れた場所は、春日山城跡、林泉寺、御館跡、鮫ヶ尾城跡、勝福寺、直峰城跡である。これらの場所について、直江兼続との関わりを、時代と共に紹介していくことにする。



春日山城跡

春日山城を、直江兼続との関係で語れば、謙信の養子となった上杉景勝とともに坂戸城から春日山城に移り住むことになってからであろう。その後、御館の乱を経て景勝が春日山城の城主となると、上杉家の家老職として春日山城に居を構えることになる。今回、春日山を戦国の山城ととらえて、そのような視点で登ってみると、これまで遠足で登ってきた山とは違った感じがした。

春日山城を目指すには、春日山神社の右側の道か、謙信公の像の左側の道かのいずれかから登っていくことになるが、今回は、右側の道から登る。最初は人が並んで登れるほどの道幅があるが、場所によっては狭くなる。また、道が大きくうねっており、城の上からは、登ってくる人がよく見え、上方からの攻撃が大変容易な構造となっている。千貫門を経て更に進むと空堀などがあり、城を守るための工夫が随所に見られる。



こちらの道を進んでいくと、直江屋敷、お花畑、毘沙門堂、実城(みじょう)、天守台の順に巡ることになる。

実城からは頸城平野が一望でき、敵が近づいてくれば、直ちにそれを知ることができたであろう。

実城の西側は樹木の鬱蒼と茂る谷であり、こちら側の守りも万全であったであろう。こちら側を少し降りて行くと、山頂近くにありながら満々と水をたたえる大井戸や景勝屋敷跡がある。



謙信公像の方へ向かう道を下っていくと、こちらも地形をうまく利用した要害となっており、下から攻めることは容易ではなかったことが想像される。

「天地人」の影響で、かなりの数の観光客が春日山を訪れており、あらためて、NHK大河ドラマの影響力の大きさを感じた。しかし、これほどのブームになっていながら、土産屋の数も以前に比べて増えたわけでもなく、今回の「天地人」ブームにあやかっただけでもなかった。これを上越人の奥床しさという目で見ると、商売気のなさに見えるか。いずれにせよ、上越の人の「利」に執着しない気質は、上杉謙信の時代と変わっていないのであろう。

久島士郎 (高28回)

越後の歴史を語る古刹 越後春日山 林泉寺



明応6年（1497年）越後国守護代長尾能景公が亡父重景公の十七回忌にあたり、長尾家の菩提所として林泉寺が創建された。御開山は曇英恵応禪師。

それから40年後、能景公の孫謙信公は、7歳で学問所として林泉寺に入る。学徳兼備の六世天室光育大和尚のもとで厳しい薫陶を受け、更に七世益翁宗謙大和尚から禅の教えを受け、「第一義」の真意を学び、悟りを開かれた。長じては儒者に老荘諸子を、また和歌、書、能、茶道、琵琶、笛などにも造詣が深く、武将でありながら高い教養を積まれていた。

謙信公の養子となられた景勝公は、1572年17歳で、また樋口与六（後の直江兼統）は12歳で春日山城に入り、謙信公から数々の薫陶をうけたのである。特に景勝公に対しては、幼少の頃より自ら筆を執って「かな手本」を与えたりと、並々ならぬものであった。兼統は、景勝の近習として常に景勝の側にあって、景勝の修学の際には陪聴の機会を与えられていた。傑出した武人で

あり、文化人でもあり、その上深い信仰者であった謙信公を目の当たりにして、兼統の好学への志が大きく広がってゆくのである。

後年、1598年に上杉家は会津へ移封となり、その後林泉寺は越後領主堀家、高田城主松平越後守家、榊原家の菩提所となり、代々から「禁制状」を下され、篤く保護された。そして徳川二代将軍秀忠公以来御朱印地の寺領を拝領し、「下馬下乗の札」を立てる待遇をも許されるなどの歴史を重ね、現在に至っている。

さて、謙信公によって春日山城から移築された惣門は、往時を伝える唯一の門である。その横を通り境内に入ると山門がある。謙信公直筆の複製「春日山」と「第一義」の大額がかけてあり、その堂々とした力強い筆跡に圧倒されて立ち竦んでしまう。1997年開創五百年を記念し建立された本堂に参り、事前にお問い合わせしておいた、第四十代御住職の笹川元祥様に宝物館のご案内とお話を伺った。



昭和46年に開館の宝物館には、上杉謙信公をはじめ、各大名ゆかりの品々が多数展示されていた。先にも書いたが、謙信公は

7歳で林泉寺に入られた。六代、七代、八代の御住職に仏の教えを通して「真理、道徳、真義」を学ばれ、24歳で京に上洛の折高野山に詣で、「毘沙門天」を深く崇拜されるようになった。笹川御住職は、「なぜ高野山に行かれたのか諸説はあるが、はっきりしません」とおっしゃっていた。もしかしたら、神々と仏を結んだ包容力のある空海の真言密教の魅力を感じられたのでは…とってしまった。

それにしても群雄割拠の時代にあって、謙信公は強い武将であっただけでなく、信

仰を通して己をいつもみつめられていたのではないだろうか。人を愛し、慈しみ、人間としてどうあるべきか、謙信公家訓に示されている。

帰郷の折には林泉寺へ足をお運びいただき、気迫溢れる謙信公に触れてほしい。今回、謙信公の思いが越後人の気質の根底に脈々と流れているように感じられた。樹木におおわれた林泉寺。清々しく咲いていた野辺の半夏生。謙信公の無欲な生き方に重なり、思わず手を合わせた。

加藤福子（高14回）

上杉謙信公家訓

心に物をなき時は、心広く體泰なり
 心に我儘なき時は、愛敬失わず
 心に欲なき時は、義理を行う
 心に私なき時は、疑うことなし
 心に驕りなき時は、人を敬う
 心に誤りなき時は、人を畏れず
 心に邪陰なき時は、人を育つ
 心に貪りなき時は、人に諂うことなし
 心に怒りなき時は、言葉柔和なり
 心に堪忍ある時は、事を調う
 心に墨りなき時は、心静かなり
 心に勇みある時は、悔やむことなし
 心賤しからざる時は、願い好まず
 心に孝行ある時は、忠節厚し
 心に自慢なき時は、人の善を知り
 心に迷いなき時は、人を咎めず

御館跡

御館とは、上杉謙信が関東管領上杉憲政のために建てた館であるが、歴史上は、「御館の乱」すなわち、謙信の突然の死去のために、長尾景勝と三郎景虎とが家督相続を巡って争ったことで登場する名前として有名であろう。場所は、直江津駅の西方1キロメートル、昔の国道18号線（今は上越大通りと呼ばれている）が信越線を跨ぐ跨線橋「御館橋」のそばにある。この付近は、当時は越後府内と呼ばれ、国分寺や至徳寺といった名刹も集中し、政治・経済・文化の先進地として反映していたようである。

御館は、東西約250m、南北約300mであり、内郭だけでも、東西135m、南北150mで二重の堀をめぐるした館だったようであるが、現在は、約50m×50mばかりの芝生で覆われた、ただの広場になっている。広場の入り口に、「御館跡」の標柱があるものの、歴史的な匂いは一切ない。四方を住宅地に囲まれ、それらの家以外、何も見えない。「御館公園」と名付けられているが、児童用の遊具が少しあるだけである。女兒の楽しげな遊び声と、雀の鳴き声だけが聞こえる、のどかな児童公園である。

「〇〇研修団」とのネームプレートのあるマイクロバスで訪れて来た6～7人の中年男性の一人の第一声、「ここで、何を見たら良いんですか？」が現状を象徴している。リーダー曰く、「案内板を声を出して読んでみましょう」というのも笑えた。確かに、このような、標柱と案内板だけの史蹟も、

日本には、多々あるなと思った。想像力を掻き立てるしかない。

「御館跡」の標柱よりも立派な石碑があったので、近寄ってみると、「西部土地区画整理」の記念碑（昭和43年4月）であった。区画整理を行う前には、まだ当時を偲ばせる遺構があったようであるが、区画整理を行い、きれいに住宅地と広場になったようである。



三郎景虎が居す御館と、景勝の座す春日山城の実城との直線距離は、約3.5キロメートル。御館公園から線路際まで数十メートル歩くと、ちょうど高田方面の線路の先に、春日山城が見える。（実際には、木立の中に埋もれて、どれが春日山城かを特定はできなかったが。）

御館の乱により春日山城下や府内は火の海となり、多くの家が焼き払われた。もし御館の乱がなかったら、府内と春日山が一体となって大都市を築き続けていたら、今の上越地方は、どんなに発展していたのだろうか。歴史に「もしも」は禁物だが……。

久島士郎（高28回）

鮫ヶ尾城跡

鮫ヶ尾城は、信濃への領地を拡大していた甲斐の武田勢に対して、上杉勢の本拠地である春日山へ至る平野の入り口を固めることを期待された山城である。天文22年(1553)から12年間、延べ5回にわたる川中島合戦において、鳥坂、猿橋、関山、飯山等の城とともに整備拡充されたものと考えられる。

天正6年(1578)3月に関東出陣を前にして謙信が急死した折に、景虎と景勝の養子2人による後継者争いが起こり、その最後の決戦場となり、破れた景虎が26歳の若さで自刃したのが、この鮫ヶ尾城であると伝えられている。

学校の遠足などで訪れる時、多くは麓にある斐太神社や斐太史跡公園であり、近郷に住んでいても城跡を登った経験者は春日山城址と比べてかなり少ないと思う。

本丸への登山道は3つある。史跡公園の管理棟脇から登る北登城道が平易で一般的であるが、城の遺産が多く見られる東登城道(大手門)か南登城道(正面口)が良いと公園管理棟で教わった。取材当日は時間短縮のために北登城道を使って本丸へ登り、そこから東登城道と南登城道は少しずつ下



本丸より春日山城跡を望む

ってみた。北登城道での本丸への所要時間は20分程度で、道中8割程度は手入れされた登山道が続く。急斜面には丸太で階段が作られていた。本丸は春日山城と比較すると数分の1程度と狭いものではあるが、標高183mでありながらも眺望は良好で、春日山城址をはじめ、前述の各城がある関田山脈、高田平野、そして日本海まで見通せる。

本丸の北側には米倉跡がある。本丸と並んで米倉があることから、いかに兵糧が重要だったかをうかがい知ることができる。その米倉跡の奥手の地面をつぶさに見ていくと、風雨で流れ出した炭化した焼米粒を見つけることができる(注意:国指定の史跡のため許可無く掘り返すことは禁じられている)。それは、かつてこの地が戦火に遭ったことを静かに物語っている。

本丸から南登城道側に一段二段下がった曲輪(平地)からは、近年の発掘調査により食器や調理器具など、多数の遺物が発見されている。特筆すべきは、井戸のある三ノ丸跡からは炭化したおにぎりが出土したことである。その表面には布目が残っていることから、布に包まれて携帯していたものと想像されている。

後日、東登城道から本丸を目指した。1時間弱の登りではあるものの、大小数カ所の掘切に地形の複雑さも加わり、身に染みて山城への攻めの厳しさを体験することができた。

高速道路を走る車の走行音が山間に響き渡る中、御館の乱での落城後、再築されることがなかった鮫ヶ尾城跡は当時の形を今に伝えている。 白倉善積(高37回)

勝福寺

鯨ヶ尾城の本丸から東に下った山麓に真言宗勝福寺がある。勝福寺には17歳の若さで温暖な小田原の北条家から上杉謙信の養子（というよりは人質）としてやってきた北条三郎、のちの上杉景虎が祀られている。謙信に気に入られた三郎には住居として春日山城三ノ丸が与えられた。また、名前も謙信が名乗っていた「景虎」が与えられるなど好待遇を受けていた。しかし、それも東の間、謙信が病死した後は、もう一人の謙信の養子であった景勝との間での2年に渡る家督争い（御館の乱）に負け、逃げ延びた鯨ヶ尾城にて城主堀江宗親の謀反に遭って弱冠26歳で自害を余儀なくされたと伝えられている。

鯨ヶ尾城跡の取材後に、事前連絡なしで勝福寺に立ち寄ったところ、運良くご住職の浅山龍蔵さん（中52回）にお話を伺うことができた。本堂に上がらせていただき、茶菓も御馳走になりながら小一時間気さくにお話を頂いた中で、印象深い内容を以下に紹介する。

- ・勝福寺に隣接した畑地には現在は「立ノ内」との小字名が残されているが、「館ノ内」に由来していると考えられている。平時、鯨ヶ尾城将の館があった可能性がある。その縁から、勝福寺では御館の乱の際に、鯨ヶ尾城で非業の死を遂げた景虎を手厚く供養している。

- ・戦乱の中で景虎の亡骸は確認されていないため、勝福寺内には墓碑に代えて供養碑が鯨ヶ尾城跡に向かって建てられている。



建立は2002年で有志による。景虎が天正7年(1579)3月24日に自害したと伝えられているため、勝福寺では新暦4月29日がその日に当たるものと定めて毎年法要を行い、その季節に見頃となるコブシの花を供える習わしとしている。特に本年は430年忌に当たり、100名以上が参列する中、盛大な法要が行われた。

- ・ここ数年、参拝者が増加しており、特に若い女性が増えていることが目立っている。去年までは2001年に刊行された『上杉三郎景虎』（近衛龍春著）などで悲劇のヒーローとして取り上げられている景虎を慕っての参拝だったが、今年になってから大河ドラマはさることながら、少女マンガ『望楼－北条三郎の野望－』（河村恵利作：単行本『花の君参る 上杉景勝室・菊姫』に収録）で描かれたことにより若い世代が景虎のことを知ることとなり、日本全国から多数の来訪がある。 白倉善積（高37回）

直峰城跡

直峰城が今、多くの人に知られるようになったのは、直江兼続の父・樋口兼豊が、御館の乱の後に城主になったからであろうか。歴史的には、御館の乱において景勝方が早い時期に直峰城を手中に収めたことによって、戦を有利にしたという重要な意味合いがあり、また春日山城から坂戸城に向かう際の、第一中継城としての戦略的拠点であった。

国道253号線を直江津から東の方へ進み、虫川のT字路を右折し、安塚の交差点を左折、更に進んで、直峰城跡の看板を見たら、また左折し、舗装されたつづらおりの坂道を登って行った所に、案内看板と公衆トイレだけがある小さな駐車場に到着する。ここから、直峰城跡を目指して、山道を歩き始めるのである。左右2本の道があるが、右側の道を選んで登って行った。

人一人が通れるくらいの狭く、結構急な坂道である。山肌を縫うようにして登っていくが、子供の頃の秘密基地遊びのような冒険心を掻き立ててくれる。歩くこと15分、やっと、頂上の本丸跡に着く。



30m×50m位の三角形のような地形が平らに拓かれている。春日山の方角を示す木標が設置してあり、もやに霞んではいるものの、しっかりと高田平野と春日山の山並みは確認することができた。狼煙でも上げれば、十分連絡が取り合えたであろう。



本丸跡には、当時を偲ばせる物は何も残っていないが、ぐるっと360度、昔と変わらぬ自然に恵まれた地形を眺めることができる。あれこれ当時を想像しながらお喋りしていると、あっという間に30分程経ってしまった。鳥のさえずりのみが耳に入ってくる。数十メートル離れた人の会話も、驚くほど良く聞こえる。まさしく、昔のままであろう。「都会の人たちがここに来ると、本当に癒されるだろうね」というのが全員の感想。

登ってきた道とは反対の山道を降りていくと、樹齢800年と言われている大樺があり、その付近にも蔵跡との表示がある郭があった。そこから、あまり急ではない道を下っていくと、最初の駐車場の左側の道に出た。

歴史ロマンとともに、自然を満喫できるスポットとしてお勧めの場所である。

久島士郎（高28回）

2 直江津の地名の起源と直江氏

直江津という地名は「直江の津」を表している。木更津、唐津、新津など、全国に「津」が付く地名は多いが、いずれも港を意味する。すなわち直江津とは、「直江」の港である。日本海に臨んで直江津港や天然の良港郷津を擁し、さらに関川の河口に位置する姿を思い浮かべるまでもない。

では、「直江」の言われは何か、そしてこの直江津と直江氏、さらに直江兼統とは関係あるのだろうか。

■直江津のルーツと直江

直江津は、日本海や関川の水運を生かして自然発生した集落であった。紀元645年の大化の改新ののちは、律令国家の特別行政区であり、かつ交通・通信の要衝でもある「駅」が置かれ、道路規模等に応じた数の馬が配置された。この駅は水門駅みなとと呼ばれたが、「水門」はその呼び名のとおりに、港を意味する。まさに直江津が置かれた環境そのままの名前である。あわせて、奈良時代には越後の国の国府も置かれた。

平安時代、わが国に荘園制度が広がると、この地にも直江の荘、津村荘などの荘園が発達する。他方、駅制は次第に衰退し、この地も水門駅の名に代わり、平安末期には直江の荘、鎌倉中期には直江の浦又は直江の津と一般に呼ばれるようになったと推察されている。

森鷗外の小説『山椒大夫』のモデルとなった「応化の橋」伝説の中に初めて「直江

の浦」が登場する。永保元年（1081年）のことである。この伝説は、のちに南北朝時代の作と言われる謡曲「婆相天ばそうてん」に取り入れられ、全国に広まったというが、婆相天には「越後の国、直江の津に舟をのらばやと存じ候」というくだりがある。

さて、ここに「直江」の呼び名が出てくるが、そのいわれ・起源ははっきりしない。『直江津町史』によれば、地勢上の特色、すなわちまっすぐな海岸線から、自然発生的にそう呼ばれていたのではないかという。富山方面から新潟方面に向かうとき、岬や岩礁が多くデコボコした海岸線が、居多ヶ浜から鉢崎（米山）のまでの間は比較的まっすぐな砂浜となる。「江」は、入江などだけではなく、古くは一般に川、海、湖などを意味した。直線とも言える海だから「直江」なのだろうという。改めて地図で確かめると、なるほどと思う。

■直江の荘と直江氏の起源

寛平年間（890年頃）、藤原鎌足六代の孫、中納言憲友が国司として頸城郡津の郷に着任するが、憲友の子憲満が津氏を名乗って地方豪族となって土着した。津氏四代の孫憲治は津氏を継ぐが、次男の康治は寛仁元年（1017年）、直江の荘を賜って直江氏を称し、直江荘司次郎を名のった。これが、上杉家重臣直江氏の起源である。

直江家は鎌倉時代、六代秀明が鎌倉に上り、将軍北条実朝に仕えたが、実朝没後北条氏に忌避され、その子秀綱は失意のうち越後に戻ったらしい。故郷直江津で海運業に専念していたと推察されている。

■直江家の与板移封、上杉家の重臣に

その後、室町時代に上杉家に認められ、重臣飯沼頼泰の旗下に属して房定に仕えた。飯沼氏の所領、与板で与板城主となった。宝徳年間から文明年間まで（15世紀半ばから後半）のことで推察されている。直江家は国司任命から約560年、直江姓を名乗ってからも440年間もの間、直江津の地に館を構えたが、ここに与板に本拠を移したのである。

天文22年(1553年)、謙信の治世になったとき、飯沼氏はその命に従わなかったため、謙信は旗下の直江実綱(のちに景綱と改名)に飯沼氏討伐を命じたという。この結果、飯沼氏の所領はことごとく直江氏のものとなり、大身として上杉家の重臣となったのである。

なお、直江氏は与板移城後も、直江津港の海運管理に当たっていたという。

■名門直江家の断絶

景綱は娘お船に養子信綱を迎えるが、天正9年(1581年)、信綱は家老同士の争いから事故死してしまう。このあと養子となって直江家を継ぎ、上杉景勝を支えたのが直江兼続である。

兼続の長男景明は体が弱く、元和元年(1615年)、22歳の若さでこの世を去る。その5年後、兼続も60歳の生涯を閉じるが、兼続は養子を迎えなかったため、ここに、実質700年余り、直江荘司次郎康治から数えても600年近くにわたって続いた名門、直江家は断絶した。

高橋 誠 (高26回)



3 東京における兼続の足跡 晩年を過ごした鱗屋敷

直江兼続がその晩年を過ごしたのは、江戸の、通称「鱗屋敷」である。

慶長11年（1606年）5月、景勝は將軍秀忠から江戸中屋敷として鱗屋敷を賜った。実際には兼続の江戸屋敷となり、兼続及びその妻子がここに住んだ。

鱗屋敷は、三宅坂方面に向かう内堀通りと桜田通りに挟まれた、現在の警視庁辺りにあったという。



桜田門から望む警視庁

能装束に使われる模様の「鱗形」という言葉に代表されるように、鱗は三角形を意味する。警視庁の姿を思い浮かべれば、なるほどと思う。面積は2千坪余り。江戸時代の史資料に詳しい専門家に照会したが、当時はまだ「江戸切絵図」が作られておらず、地図として残されたものはないという。



法務省旧本館正面

ちなみに上杉家（米沢藩）の江戸上屋敷は、霞ヶ関1-1-1にある法務省旧本館（重要文化財）北側及び隣接する法曹会館のあたりであった。

法務省の塀の植え込みには、米沢市が設置した小さな記念碑がある。鱗屋敷や重要文化財の桜田門に隣接した場所である。上杉家は慶長11年にこの桜田門の石垣の修築を命じられており、兼続がその総指揮をとったという縁もある。

兼続は元和5年（1619年）12月19日、ここ鱗屋敷で波乱に満ちた生涯を閉じた。享年60歳だった。法名達三全智居士。兼続の妻お船は、その後やはり鱗屋敷で過ごし、寛永14年（1637年）、81歳で没した。

なお、鱗屋敷はその後1657年の明暦の大火で焼失し、上杉家の申し出によって幕府召し上げとなっている。

鱗屋敷跡の警視庁及び法務省旧本館へは、地下鉄有楽町線桜田門下車、徒歩1分である。

高橋 誠（高26回）

高田高校に掲げられた「第一義」

高田高校の体育館に「第一義」の額が掲げられていたことは、校友会各位にとっては、周知のことであろう。昨年完成した新体育館にも、これまで同様、額が掲げられている。



この「第一義」は、上杉謙信が大切にしていた言葉であり、林泉寺の山門に謙信の直筆の額として掲げられていた（現在掲げられているのは複製であり、現物は林泉寺宝物館に展示されている）。一昨年の高田高校の卒業式に、NHK 大河ドラマ「風林火山」で上杉謙信役を演じた GACKT がサプライズゲストとして訪れたのも、この額が高田高校に掲げられていることが縁であったと言われている。

この額の由来については、故竹澤攻一校長の著書『新潟県立高田高等学校沿革史余話』に、第9代鈴木卓苗校長の訓辞として次のように記されている。「丁度我が霜台公の在りし日昔の英風面目をさながらに偲ぶべき唯一の宝物林泉寺山門の大額に跡をとどむる第一義をそのままに採って以て本校の修養目標と定めた…」また「『第一義』の

大額は昭和16年の火災には火にかからなかったようだが、昭和32年の火災では焼け落ちてしまった。現在の大額は再度、林泉寺山門の拓本を取り復原したものである」とも書かれている。

「第一義」とは、禅の書物『碧巖録』に出てくる達磨大師と梁国の武帝が問答を交わした逸話のなかに出てくる語句であり、釈迦が悟った“万物の真理”を意味する。上杉謙信は、林泉寺の和尚である益翁宗謙とこの逸話を題材に問答し、「第一義」の言葉で、仏の道に導かれたようである。

達磨大師は、「第一義」は「廓然無聖」（カラリとした虚空のようなもの）と答えているが、まさしく禅問答である。この逸話を聞いて、謙信は何を感じたのであろう。

林泉寺宝物殿に、謙信直筆の「慎篤」「愛徳」「誓志」「隔邪」「義恭」「善行」の6幅の掛け軸が展示されている。これらのことが、謙信が「第一義」から悟った、生きていく上で大切なことではないかと、林泉寺の現在の住職はおっしゃる。

高田中学・高校で育った私たちは、無意識のうちにも数年間、体育館に掲げられた「第一義」の文字を目にしてきたのである。私たち卒業生が、この「第一義」から、それぞれ、何かを悟っていくということが、高田中学・高校というものの校風・伝統の継承になるのであろう。

久島士郎（高28回）

「天地人」に沸く上越のこれから



今年、上越は当たり年になりました。NHK大河ドラマ「天地人」の放映、二巡目国体の開催（9月26日～）、JRのデスティネーション・キャンペーン（10月1日～）など、上越圏外からの観光客数が過去最高となるのは間違いない状況です。

とりわけ「天地人」については、1月からの放映で注目を浴び、現在流行中の「歴女」を含め、かなりの人々が訪れています。

放映に合わせ、直江津屋台会館で開催されている「越後上越・天地人博」は、当初の目標入館者数20万人を8月11日にクリアし、30万人に迫る勢いです。ゴールデン・ウィークや夏休み期間中は、高速道路の休日1,000円の効果もあり、連日混雑していました。また、秋の行楽シーズンには団体客の予約がかなり入っていますので、賑わいが予想されます。

関連して、春日山城址、春日山神社、林泉寺等も例年を超える人出となっています。

気になる経済効果ですが、「天地人博」の売店を始め、観光物産センター等の土産品については好調ですし、地元の人が新たな土産品（お菓子、Tシャツ、携帯ストラップ等）を開発し、売上げを伸ばしているケースも見られます。また、昼食会場として周辺の料理屋、ホテル等も団体客やグループ客中心に利用されており、数年前から取り組んできた「謙信公のかちどき飯」がようやく日の目を見た感があります。

しかしながら、まち全体で考えると、圏

外からの観光客の行動範囲が限られ、例えば直江津商店街、高田商店街などへの効果は微々たるものと考えられます。これは、宿泊施設（温泉）が中心部に無く、滞在時間が短いことによるものと思われます。団体客に限ったことかも知れませんが、宿泊場所は圏外の温泉になっています。

さらに、上越の名所や物産などの「売り」が圏外の方に伝わっておらず、ルート観光に結びついていない事にも起因しています。上記以外にも、弥生時代を始めとする歴史的な見どころや人物、海や山そして棚田等の自然の魅力、また米、酒、魚を中心とする食文化、雁木や老舗店舗などの町並み、「観桜会」や「ハス祭り」そして「レルヒ祭」など四季を活かしたイベント等、豊かな観光資源が挙げられ、まるで宝石箱のようです。そしてそこに住む「人」の魅力があることにも異論はないでしょう。

外貨獲得の手段として観光に力を入れるのであれば、受入体制について官民一体となってランドデザインし、アクションを起こしていく必要があります。2014年には北陸新幹線が開業しますし、高田開府400年を迎えます。今後5年間にどれだけ上越の魅力を引き上げられるかが、ポイントです。

「井の中の蛙」では話になりませんので、外からの視点を持っている皆様の意見が重要となってきます。生まれ故郷の再生に是非、ご協力をお願いいたします。

小林 元（榊武蔵野酒造代表）

小説に見る直江兼続

藤沢周平『密謀』に魅了されていた。「関ヶ原」前夜、上杉景勝を倒すために会津近くまで東下した家康軍が石田三成挙兵を聞き引き返した折、勇名を馳せた上杉軍団が追撃に出なかったのは何故か。この小説は、歴史上の謎を軸に、彼のそれまでの時代小説と一線を画し、歴史小説の新たな領域を拓いたものとして知られている。歴史的事実の尊重と物語を紡ぐ想像力と緻密な心理描写を柱に、苦労人藤沢周平の人間洞察が傑出した作品と言えるのではなからうか。

火坂雅志『天地人』・藤沢周平『密謀』を語るつもりでいたら、続々と課題が舞い込んだ。尾崎士郎『直江山城』『士郎史談 直江山城守』『直江兼続』、坂口安吾『直江山城守』、松下英麿『直江山城守兼続』、邦光史郎『直江山城守』、永岡慶之助『直江山城守兼続』、童門冬二『歴史探訪直江兼続』、畑山博『宿老直江兼続対謀将徳川家康』、南原幹雄『「家康討つべし」直江兼続の策謀』（以上、河出文庫『軍師直江兼続』所収）、山田風太郎『叛旗兵 妖説直江兼続』、童門冬二『直江兼続 北の王国』…。不明を恥じた。直江兼続は、それほどまでに、多くの人々の心を捉えて離さない人物だったのである。その魅力はどこに？

近世学芸史家松下英麿による『直江山城守兼続』は小説ではなく、豊かな史料を読み解きつつ深い理解に至った直江兼続評伝

であるが、実は、このアンソロジー中40頁と、他を圧して最も長い。しかも取り上げているのは、二十歳の直江兼続による七言絶句や正月連歌会での景勝との聯句、転封の「移転心得」、「直江状」、関ヶ原後の心象の詩とされる「雪夜圍爐」、兼続寿終の年の、五山詩僧の名流に比される透徹した「洛中之作」。さらに彼は、上杉家30万石減封翌年の「漢才之衆」「和歌之衆」から兼続の7篇の漢詩を挙げ、「豊かな詩情と緊密な詩構成の手腕において中世期以来のもっとも注目すべき詩人ではないか」と賛辞を惜しまない。

兼続は、朝鮮出征で蒐集した漢籍を、創建した臨濟宗禅林寺に設備して子弟教育の講習所と為したが、この「禅林文庫」こそが、日本の漢籍の宝庫である。宋版『史記』90冊の完本は、その中の白眉という。さらには、「直江版」と呼ばれる「文選」翻印(出版)、「論語」10巻、「春秋左氏伝」などの出版…。上杉謙信の文武両道、好学、風流は、兼続によって豊かに受け継がれたのである。「四季農戒書」のように民を愛し慈しむ心に見える書もある。

このように大きく広く深い傑物を小説に描くとすれば、作家はどう描き得るのか。丁々発止の真剣勝負で対峙が甘ければ作家の方が敗れることもある、歴史小説の怖さ。

雪深い越後の自然と謙信の義の心を大き

く配した成長小説でもある火坂雅志『天地人』は正統派の歴史小説で、この混迷の時代の必然。



藤沢周平『密謀』は、深い素養に支えられて人と世に対峙する完成された人間としての兼統を描いたが、史実の隙間に草(忍び)を配し、物語を膨らませた。



史実を忠実になぞり、削がれた力強い文体で際立つ、尾崎士郎『直江山城』『士郎史談 直江山城守』『直江兼統』は、朗読にも



耐える。坂口安吾『直江山城守』は兼統を描くというよりも、その知謀の背景と理由を推し測ることに重きがあった。

山田風太郎『叛旗兵 妖説直江兼統』は米沢移封後、必死の叛はやらぬと叛骨を秘した兼統に替えて、直江四天王に見果てぬ夢を描いた。『戦中派焼け跡日記』『戦中派闇市日記』の作家の憤怒が垣間見える。



童門冬二『直江兼統 北の王国』は、「越後の土の子」として民とともに在る国を目指した兼統の、米沢移封までの奮闘を描く。戦後の日本社会への眼差し。



いずれの小説も、そのように書かずにはいられなかった時代精神を感じ、悲痛な感じをも抱いたことを記しておく。

真理子シャイフェレ (高21回)



■ 主要参考文献

- 『上越市史』普及版 上越市史編さん委員会 上越市 平成3年
- 『直江津町史』白銀賢瑞 直江津町役場 昭和29年
- 『米澤市史』復刻版 登坂又蔵編纂 名著出版 昭和48年(原本は昭和19年)
- 『米沢市史 第二巻 近世編1』米沢市史編さん委員会 米沢市 平成3年
- 『上越市の文化財』上越市教育委員会 平成11年
- 『にいがた歴史紀行14 上越市』花ヶ前盛明 新潟日報事業社 平成7年
- 『新潟県人物小伝 直江兼続』花ヶ前盛明 新潟日報事業社 平成20年
- 『直江城州公小伝』今井清見 慧文社 平成20年
- 『「天地人」を歩く』火坂雅志 祥伝社 平成20年
- 『「天地人」探訪 直江兼続』武山憲明 音羽出版 2008年
- 北越軍談付録巻第一『謙信公語類』上杉史料集(中) 人物往来社 昭和42年
- 『新潟県立高田高等学校沿革史余話』竹澤攻一 新潟県立高田高等学校校友会 平成18年